みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ナラティヴ・ポリティクスとしての現代異人論の探求＜共同研究：グローバル時代における「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクス＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山, 泰幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009493

ナラティヴ・ポリティクスとしての現代異人論の探求

文・写真　山 泰幸

グローバル時代の「異人論」

急激にグローバル化が進展し、人間の移動が激しさを増すとともに、多文化的状況が今後さらに進展することが予想される。この大量移動の時代では、程度の差こそあれ、誰もが自らも「異人」となる経験をもつことが当たり前となっている。問題は、人間の移動が激しさを増すことで、他者と自己の境界が絶えず揺れ動き、不断に更新され、むしろ境界それ自体が意味をなさないような状況が生み出される一方で、それに反発するかのような境界の線引きの動きとともに、大小さまざまなコンフリクトが発生し、世界各地で「不寛容社会」が出現している点である。

こうした状況に立ち向かうために、この共同研究で手がかりとするのが、「異人論」である。文化人類学および民俗学の学問的伝統においては、外部から訪れる他者、すなわち「異人」に対する歓待や排除、蔑視あるいは畏怖や憧憬などの観念や行動をめぐって、異人論と称される膨大な研究蓄積がある。

もちろん、地球規模の社会環境の変容に加えて、従来の口承性や書承性を超越するメディア環境の変容の影響下で、文化的他者としての異人を迎える側の経験は、その質と量において、かつての異人論が想定していた状況とは比べものにならない規模となっている。

そこで本研究では、こうしたメディア環境の変容を視野に入れながら、異人論という視点や方法を再考し、鍛えなおすことで、人文科学の立場から現代的問題の解決の糸口を探ることを目的としている。

「ナラティヴ・ポリティクス」という視点

この共同研究が、異人論を再考するにあたって導入するのが、「ナラティヴ・ポリティクス」という視点である。

異人論は、山口昌男の「中心と周縁」論の問題圏のなかから浮上し、かつて同時代の多くの分野の研究者の関心を集めた。商人としての異人に注目した経済人類学の栗本慎一郎、「第三項排除」という独自の理論からスケープゴートとしての異人を捉えた社会哲学の今村仁司、ストレンジャー・キング（異人王）の神話を権力の起源の問題から論じた社会学の上野千鶴子、その他、異人に言及した歴史学者や英文学者・国文学者などを挙げれば、相当数に上ることだろう。こうした異人論に対する関心の高まりにともない、岡正雄の異人論、柳田國男の山人論、折口信夫のまれびと論など、先行する諸研究が改めて注目されることになった。

こうしたなか、『異人論』と銘打った書籍を出したのが、赤坂憲雄と小松和彦である。赤坂憲雄の『異人論序説』は、さまざまな分野で取りあげられていた問題群を、異人をキーワードに統一的に整理し把握しようとした意欲作であり、異人論の「総論」というべきものであった。

一方、小松和彦の『異人論』は、小松が「異人殺し」と名付けた、村人が旅人を殺害してその所持金を強奪する伝説を分析した論文を中心に構成された論文集であり、いわば異人論の「各論」を目指したものであった。

異人論の多くは、人間社会を宿命づけている排除や犠牲のシステムを繰り返し告発するような議論になっている。しかし、異人論のなかには、受け入れる側がどのような異人をめぐる物語を有しているのか、あるいはどのように異人を語るのかに応じて、異人に対する認識や対応も変わり、異人の側もまた自ら語りを操ることによって、その生存をかけて接触・交渉を行っている点に気付いている議論もあった。後者の議論からみれば、異人論とは、「寛容性／非寛容性」の境界線上で繰り広げられる、語りによる実践、せめぎ合いにほかならない。この共同研究では、異人論を、「寛容性／非寛容性」をめぐるナラティヴ・ポリティクスとして再構成することで、



鄭篠筠・中国社会科学院世界宗教研究所所長から西尾哲夫教授への記念品の贈呈（2019年2月、国立民族学博物館）。

山 泰幸（やま よしゆき）
関西学院大学人間福祉学部教授。専門は民俗学、思想史、社会文化理論研究。著書に『江戸の思想闘争』（KADOKAWA 2019年）、編共著に『異人論とは何か―ストレンジャーの時代を生きる』（ミネルヴァ書房 2015年）、などがある。

現代的課題に応える理論として、ヴァージョンアップしたいと考えている。

異人論を、ナラティヴ・ポリティクスとして再構成することが可能とすれば、現代社会に流通し、支配的力をもっているマスター・ナラティヴが視野に入ってくるだろう。

たとえば、グローバル化とメディア環境の激変を背景にして自己や他者の境界が激しく揺れ動く状況における「他者」をめぐるナラティヴと、伝統的な異人をめぐる説話や民話との相互影響関係を解明し、統一的な視座のもとで把握することが課題となるだろう。さらに、グローバル化とメディア環境が激変する現代におけるナラティヴの伝承形態の解明も視野に入れながら、「不寛容社会」を克服するための説話・民話の現代社会的機能を解明し、その潜在的可能性を引き出すことによって、まさしくカウンター・ナラティヴとして、これを人類社会共存のための文化遺産として再活用するための道筋を見出すことも課題となるはずである。その過程で、従来的な説話・民話にとどまらず、新たなメディア環境における物語表現、マンガやアニメなど、広く社会的に影響をもつ物語作品のなかでの異人をめぐるナラティヴも視野に入ってくるだろう。


参加者の集合写真（2019年2月、国立民族学博物館）。

日中国際シンポジウム

最後に、2018年10月に開始した本共同研究の成果の一部を紹介したい。

2019年2月9日（土）、10日（日）に、関西学院大学シルクロード研究センターと共催で、同センターが招聘した中国社会科学院民族学與人類学研究所、中国社会科学院世界宗教研究所、天津工業大学馬克思主義学院の人類学者、民族学者など関連分野の研究者の参加を得て、「シルクロードと文化交流―人の移動、表象、物語」をテーマとする共同研究会を国際シンポジウム形式で開催した。

共同研究会では、伝統的な説話文学の研究から現代民話の研究まで多様な分野からのアプローチがあり、じつに幅の広いテーマの発表がなされた。ここで注目したいのは、それらの発表にはいくつか共通した関心事がみられたことである。1つは、異人をめぐるナラティヴの多くは、人間以外の存在である動物などの「異類」をめぐるナラティヴをともなっているが、このような異人と異類をめぐるナラティヴから、人間と自然との関係性を垣間みようとする関心である。もう1つは、想像的な異国イメージをめぐる物語表現の全体のなかで、異人をめぐるナラティヴを理解しようとする関心である。興味深いことに、こうした関心は洋の東西を問わず、また古典的な説話伝承だけでなく、現代芸術を取りあげた発表にもみられた。

ナラティヴ・ポリティクスとしての現代異人論の探求は始まったばかりである。今後も、試行錯誤を続けながら、模索を続けていきたいと考えている。


シンポジウム会場の様子（2019年2月、国立民族学博物館）。